

物を除く外、悉く焼失した。午後一時半頃、飛火を通町に送つたのである。斯くて学校の被害額は、器具・標本類等を合せて、四十七萬餘圓に上つた。當時は休暇であつたから、學生には一人も被害者を出さなかつた。町内の死者は百二十名であつたが、多く勤め先で死んだものである。

當町の發火は忽ちに起つたので、字地の住民は、命からんく逃げたのであつたが、餘裕は十分あつたので、家財などを持つた者もあつたから、大岡川・田畑などに、荷物などが落ちてゐた。この地は格別焼死者を出さなかつた。翌日頃から埋立地方面の罹災者が、老人や子供を連れて、續々避難に来て、手蔓を求めて、丘地の残つた家に寄寓し、手蔓のない者は河邊などに形ばかりの假屋を立て、救護物資の配給を受けて、暫く露命をつないでゐた。地元の罹災民も同様であつた。又朝鮮人の噂は他の地と變らず、二三兇事もあつた。要するに本街は被害は甚大であつたが、市の中央部に比しては、其被害少なかつたことは、不幸中の幸であつた。町民は之れをせめてもの心遣りとして、中央部の大被害に同情を爲し、只管一家一郷の復興に努力した。その後中央部から移住する者も多く、新しい家が出來て、一年有半には、町内の戸数が、震災より増して、約三千三百戸となつた。他には見られない盛んな復興の様であつた。

第四章 本市第四方面

山手町——北方町——本牧町——根岸町(堀割川以東)——上野町——千代崎町——中村町(堀割川以東)
石川町——石川仲町——元町——諏訪町

第一節 一般狀況

第四方面は、市の東南部を占める一帯の丘陵地を區域として、北は中村川と其の下流の堀川を隔て、關外關内に隣り合せ、西は堀内・瀧頭及磯子の各町に接し、其の境邊に堀割川が鑿たれ、東と南は崖となつてゐて、其の下は東京灣に臨んでゐる。域内至る所丘陵起伏して、所々に方言で谷戸といふ溪谷地がある。尙四邊の崖下にも平地がある。丘陵地は山手町を除くの外、概ね人家は澤山ないが、溪谷地及低平地は町になつてゐる。上野町・千代崎町・石川仲町・石川町・元町・中村町などは、何れも商店住宅も相當あつて、賑やかであつた。山手町は歐米人の住宅地で、早くから拓かれた所で、洋館が立ち並んでゐた。本地域に於ける震災の影響は、山手町が丘陵地でもあつたに拘らず、震害火災共に激しく、慘害を呈した。

前記の低平地及溪谷地が之に亞ぐの被害を見た。山手町を除く丘陵地は、震害が輕微であつたのみならず、火災も伴はなかつた。根岸・本牧兩町の南海岸を成せる一部は、低平地ではあるが、被害は例外に輕微であつた。尙域内所々に大小の崖崩れを生じ、特に石川仲町に於て、慘害を呈した。斯くて本地域で災害の甚だしかつたところは、域内總面積の約五分の一に過ぎなかつたけれども、而も災害の輕微であつたのは、主として丘陵地で、人家の疎薄な所であつたのに基く。歿死者は山手町及石川仲町・石川町に於て特に多かつたが、大體に於ては少くて濟んだ。但し通勤人の住家多い所なので、關内方面其他勤務先に於て歿死を遂げ、或は行衛不明となつた者が尠くなかつた。直後中村町・根岸の丘地及新山下町の埋立地は、此第四方面地域の人々のみならず、關内外各方面より遁れ來た者の絶好の避難場所となり、其の人々は數萬であつた。引續き丘陵地や谷戸地に假住を構ふる者が多く、又残つた家々も寄寓者で滿たされた。

第二節 山手町

山手町は市の東南部の丘陵地の中、最も景色のよいところで、山下町と同じ外人街である。山下町は商業街であるが、こゝは高臺の靜な街で、學校病院旅館教會堂劇場邸宅

等煉瓦造りや、ペンキ塗の洋館が建てられてゐた。樹々の生ひ茂つた間に綺麗な洋館が並び立つて、なんとも云へない異國情調が感じられる。この油繪のやうな所は一夜にして廢墟に化してしまふとは、誰か想像の及ぶ所であらう。此町の震災前の戸數人口は、警察署の調べに依ると、一千六百七十七、五千三百七十二人で、其の内外國人の戸數七百二十一人口、一千六百八十八であつた。元來高臺で、地盤は鞏固である筈なのに、傾斜面や窪地を埋めて地均らしもよくせず、大邸宅を建てたのであつたらしい。それであつたから、大地震が襲來すると同時に、建物の多くは支離滅裂に粉碎して、即死するもの、下敷となつて壓死する者等、實に無慘な光景を呈した。つゞいて火は各館七箇所から焰を擧げ、遂に全燒するに至つた。燒失した家屋は六百六十三戸であつた。罹災建物の主なるものは、山手警察署・元街小學校・キリンビール株式會社、外國關係では、西班牙公使館、秘露公使館、佛國總領事館、智利總領事館、瑪瑙總領事館、秘露領事館、廣濱一般病院、英國海軍病院、米國海軍病院、フォーレンスクール・セントジョセフスクール、半燒サンモールスクール、獨逸小學校、露國中學校、ユニオン教會、クライスト教會、ローマカトリック教會、ホテルテムブルコート、ブラッフホテル、フェアモンドホテル、櫻山ホテル、ゲーテ劇場、内外人共同經營のものでは、紅蘭女學校、董女學校、女子聖經學校、共立女學校、女子神學

校フェリス女學校等であつた。墨西哥總領事館は倒潰したけれども、類焼を免かれた。當時、震害が如何に酷烈であつたかは、町の東端なる俗稱「見晴らし」の崩壊を見ても知れ得るのである。「見晴らし」は新山下町埋立地の頂上にあり、そこは約四十尺の斷崖になつてゐる。混泥土で固めた部分が、約三十間許りが没落した上に、其の左右の崖が七十間許りが大崩壊したので、縁に在つた住宅三戸はもんどり打つて崖下に顛落した。其の他、地藏坂の上に在つたテンプルコートは、俗に日光屋敷と呼ばれ、紳商淺野氏の經營に係る有名な旅館で、前持主外人某が日光廟に擬して、ある限りの美を盡して建てた物であつたが、激震一搖の下に崩壊し、石垣諸共坂路の中腹に顛落し、間もなく火災に罹り、九名の慘死者を出だした。代官坂の上に在つたレッツ建物といふ煉瓦建五階の外人居共同住宅には、露國の亡命客約四十名滞在し、中將アフナチーフ氏の夫人及令嬢も滞在してゐた。邦人も多少居たのであつたが、此建物も微塵に崩壊して、人々大半其の下敷となり、或は其の儘即死を遂げ、或は生理となつた儘、襲ひ來つた猛火の爲めに焼死を遂げたものもあつた。辛くも飛び出でた者は數名に過ぎなかつた。一年八箇月を過ぎた十四年四月にも、煉瓦屑の中から數人の白骨が発見された。佛國人の經營に係るサンモールスクールの倒潰焼失では、邦人及佛露兩國人の尼僧二十八名枕を並べて慘

死を遂げた。其の多くは妙齡な人々であつたが、六七歳の雛尼が慘死したなどは傷ましきことではないか。五十五番女子青年會館の庭園内には、十四五名の焦死體が横たはつてゐた。この人達は元町から斷崖を攀ち上つて避難中、上下からの火氣に蒸し殺されたのであつた。キリンビール會社は地域の東南に在つて、敷坪八千を有する大建物であつたが、是亦滅茶苦茶に倒潰且焼失して、職工事務員二十六名が殃死した。高い塔狀の乾燥室のみが、鐵筋であるので、僅かに倒潰を免かれたけれども、内部は一切焼失した。元町二丁目、に面する崖上に在つた露國人の住宅、外三戸の住宅も崖下に顛落した。ユニオン教會劇場グレート座佛國領事館山手警察署等は、其の倒潰の様が特に猛烈であつた。外人共同墓地の墓石は大半顛倒した。墓地の角に設けられた世界戦争の記念門は、先年英國皇儲殿下の手によつて除幕式を舉げられた者であるが、惜しくも破壊した。所々地面に生じた龜裂、其他目に觸るゝもの、一として慘禍の激しかつたことを語らざるものは無い。唯、地域の一角にある山手公園のみは、地面に龜裂も生せず、火災にも冒されず、樹々の葉が茂つた廣い庭も前の儘で、當時この公園こそ唯一の避難場所となつたのである。

同街では建物の被害は甚しかつたが、死傷は多いやうでも、實は少かつた方である。

蓋し本街居住の外人は、主として、上流の人士、若しくは紳商で、當時日光、輕井澤等に旅行中の者尠くなかつた。又山下町のオフィスに出勤中の者も多かつた爲めであらう。尙こゝには日本人の邸宅も少しはあつた。教會關係の男女、其の他外人に備はれた邦人のコック、ボーイ、ウェイトレス、庭作り等も、或は外人館の一室に、或は庭園の一隅に寄寓し、多數居住してゐたことで、其れ等の遭難も固より尠からずあつたのである。斯くて同町の歿死者數は百九十四名、其中主要なる人々は、佛國總領事デジャアデン氏、英國海軍病院長夫人、米國海軍病院副院長夫妻等である。多く死者を出だした家庭を記すると、二十六番小林啓三郎方で主人外三名、百二十番佛國人ダルビー方で雇人を合せ七名、七十七番葡國人リベル方で家族六名、支那人鮑焜方で主人外家族十二名、雇人數名、何れも壓死を遂げたのであつた。

山手町の海岸に沿ふた崖下の一帯は、新山下町である。先年來、淺野埋立株式會社の請負によつて埋立てられ、八萬坪の面積を有する地である。震災當時はまだ人家もなかつたので、山下町及山手方面の好い避難場となり、一時數萬の人が逃げ込んだが、海嘯を恐れて散つたものもあつた。二日の夕刻、横須賀の鎮守府から派遣された驅逐艦の陸動隊が、この埋立地に上陸して、こゝを救護作業の根據地とした。幾十隻の船艦が常

に往來をして、救護物資を陸揚げし、或は避難民を乗せて、關西地方に送つた。

當時本地域住民の多くは、山手公園、外人墓地、根岸及鷺山方面及新山下町の埋立地に立退いた。當地は市内の他の方面に較ぶれば、避難には概して障害を感じなかつた。其後三四日頃より各方面或は各地方に分散して、假屋を造り、十月には關西府縣聯合寄贈バラックが、山手公園内に建てられた。外國人の多くは我官憲及各本國救護團の保護を受けて、或は阪神地方に赴き、或は歸國した。震災後の同方面は跡片付遅れ、二年も經つ今日でもまだ復興しない。何しても外人居留地であるから、外人が歸つて來なければ、どうすることも出來ない。

第三節 北方本牧根岸方面

北方本牧及根岸方面は、市の東南部にある丘陵地で、廣いところである。丘陵地の多くは畑や林で、人家は少ないけれども、住宅地としてよい土地であるので、紳商の別荘も尠くない。谷戸と稱する地や、沿海の平坦地には、所々に市街地があつて、相當の賑ひを呈してゐた。震災では、丘陵地多く人家少ない關係上、被害は少なかつたが、電車沿道の市街地は低地なので、麥田上野千代崎の一帯と箕輪下小湊宮原原の各一部乃至大部分

は、火災を伴うて、大きな災害を受けた。堀割川界限にも火災があつて、多少の被害があつた。横濱刑務所の被害は甚しく、收容者及職員に數十名の死者を出し、拘禁設備も全く破壊したので、已むを得ず、收容者の全部一千餘名を一時解放するの餘儀なきに至つた。

廣場や丘が多くある北方根岸本牧等の方面は、避難地としてよい所なので、各方面から罹災者が蝟集した。學校寺院等に收容され、又は假小屋を建て、一時居住した者もあつた。残つた家屋の稍、大構へな所へは、知つてゐる者は固より、知らぬ者までも、傳手を兼ねて詰め掛け來た。だから何處の家にも二三の世帯はあつた。救護に盡瘁した同地の青年團救護團自警團等の活動振りは頗る目覺しかつた。

一 北方町 上野町 千代崎町 諏訪町

北方町は、東の一部が海に面してゐる地域で、丘陵地であるが、中程には廣い平地があつて、商店住宅があり、一部は電車も通じてゐて、相當賑ひを呈してゐた。地域内は字上野、西之谷、千代崎町、竹之花、小湊などに分れ、震災前の戸數二千六百八十七を算した。本地域は震災に依り、各字とも、市街地ではかなり大きな被害を見たのみならず、字上野千

代崎町、竹之花の殆んど全部及西之谷、泉、小湊の一部に火災を伴ひ、慘害は一層大きかつた。崖崩れも所々にあつて、之に因る被害も尠くなかつた。

(イ) 上野町 千代崎町 竹之花 泉

西より東へ順に、上野、千代崎町、竹之花、泉の五字は、北方町の中部を占め、北は一帶に丘陵で、山手町に續き、南は平坦で、市街地を成し、戸數は約二千戸であつた。其中上野は約九百戸、千代崎町は百十戸、竹之花は六百戸、泉は四百五十戸を有してゐた。大震災の起るや、其約七分通りは倒潰した。尙所々に發火して、上野町、千代崎町及竹之花は殆んど全滅した。斯くて燒失區域は、山手町の夫れと連絡して、各町火の海となり、燒失戸數約一千五百に上ぼり、字上野の小字、豚山の家屋僅かに數十戸を残すのみであつた。字泉も、西は竹之花の火を被つて、約百戸を燒き、南は箕輪下から延燒して來た火を受けて、十六戸を燒いた。罹災した主なる建物は、千代崎町の辛酉銀行支店、竹之花の北方小學校、上野の日蓮宗妙香寺の一部、大黒堂等である。崖地は崩壞所々に生じ、上野では崖下の四戸建一棟を埋没して、八人生埋めとなつた。死者の數は確には判らないが、五字で少くとも百名を出した。僅かに百十戸の千代崎町ですらも十人、四百五十戸の泉も四十

一人に達したのである。上野の運送業酒井竹次郎方では、夫婦及子供一人壓死して、一家全滅した。泉の田島某方では、妻女と子供三人焼死した。此方面は流言蜚語に因る騒擾も甚だしく、之が爲めに二三の犠牲者を出だしたことは、遺憾なことである。妙香寺山・山手公園及上臺の丘陵が、罹災民の主たる避難場所となつた。こゝでも假屋を造つて住む者が多かつた。妙香寺山では、墓地の卒塔婆を組立て、材とし、二三戸假屋を造つた。これは奇觀を呈してゐた。

(口) 西之谷

西之谷は西南に丘陵を負ひ、東北は平坦な市街地で、電車路を隔て、上野町及千代崎町に隣合つてゐる。災前の戸數約八百。表通には商店があるけれども、大體は勤め人、労働者などの居住地で、農家も幾分交ちつてゐる。震災では約百八十戸は全潰し、約四百戸は半潰又は大破した。丘地でも約八十戸の中七戸倒潰した。同地では發火しなかつたけれども、午後二時半頃になつて隣接の千代崎町・上野方面の火の手が地内に延焼し來り、電車路沿ひの市街地二百四十餘戸を焼き拂つたが、青年團員等總出となつて、下水を汲み出し、消防に努め、漸くにして消し止めた。北方太神宮の神樂殿及社務所は

焼失したけれども、本堂は青年團員の努力で焼失を免かれた。奥まつた地域にある日蓮宗善行寺は、市内有數の伽藍で、本堂庫裡とも傾斜したが、倒潰は免かれた。死者は地元では七人を出だしたに止まつたけれども、關内方面に出勤中遭難したのが四十餘人あつた。一年有半後の家屋數、約六百を算した。震災後、中央方面より避難し來た者は、一時四千餘人に上つたが、其後大部分は退散したけれども、踏留まつて、焼残つた家屋に寄寓するものもあれば、或は丘地に假屋を設ける者も少くなかつた。衛生組合員や青年團員等は、配給救護の爲めに熱心に働いた。善行寺に寄寓した者が多い時には、五百人にも上ぼり、其後漸次退散したけれども、十一月末には七十名残つてゐた。其間住職田中海勇氏が配給救護及埋葬供養等の爲めに努めた。

(ハ) 小湊

北方町の東端海濱なる字小湊は、主として勤め人の住宅で、其他商店・漁屋等三百六十餘戸を有する地域で、尙外に俗稱チャブ屋といふ輕便ホテルが、十數軒もあつた。震災の被害は相當激甚で、全半潰八分通りに達した。地内二箇所より發火し、忽ちにして約七十戸を一蹶めにした。海岸の石垣も所々崩壊した。死者は地元にて十餘名、就中高

橋病院では患者五名死んだ。他所に出でての遭難者もあつた。

(二) 天沼竝に諏訪町

天沼竝に諏訪町は、三方山手町の丘陵に圍まれた傾斜地である。諏訪町天沼と續いた町である。震災前には兩地合せて戸數百八十八、天沼百四十、諏訪町四十八、人口七百五を有し、住民の業務は、外人住宅の雇人又は外人を顧客とする洗濯業、雜業等であつた。震災の起るや、附近山手町の洋館は、大部分倒潰したに拘らず、本地域の家屋は、全潰約三割半潰二割であつた。町の上ぼり詰の山手町の石垣、高さ約一丈五尺、長さ約二十間が、本地域に向いて崩壊したので、人家三戸を埋め、三人を壓殺した。地内からは發火しなかつたけれども、午後三時頃、山手町を焼いた火が、四方から包圍して來たので、皆々目星き家財を取纏め、山手町なるセントデッセフ學校の運動場及外人墓地に避難したが、運動場に入つた人々は、何れも黒煙に取捲かれ、一人窒息した程であつた。斯く全地域は一戸も剩さず焼失し、鎮守の諏訪神社も焼失した。死者は地元にて十二人、勤め先にて九人あつたが、中にも天沼なる宮内金三郎といふは山下町の商館で、妻及二人の子女は自宅で、何れも歿死を遂げ、一家全滅に陥つた。震災後地元の家々は、外人の顧客を失つた爲め、バラ

ック居住者の立退いた後は、急に寂莫となり、一年有半後に至つて、漸く七十七戸で、外人屋敷はない。

二本 牧 町

本地域の半は丘陵地で、人家は極めて少なかつた。字上臺の大部分及字臺の北は平地で、市街地であつた。戸口も稍、稠密してゐる。全地域の戸數約八百三十、人口約四千で、市街地には商家が建ち續いてゐるが、其の他は勤め人、農家、自稼者が多く、中には相當な邸宅もあつた。目星き建物としては、瓦斯局本牧出張所、東本願寺出張所等である。家屋諸建物は平地で八分通り、丘陵地では四分通り倒潰した。殊に本地域の被害として著るしかつたのは、到る所の崖崩れで、臺山に六箇所、上臺に三箇所、臺に二箇所、大鳥に一箇所、孰れも大崩壊で、字臺山の如きは、高さ約四間、長さ約五十間、幅四間の崩れがあつた。高さ五間の字臺の崖が崩れ、その下の東本願寺出張所が丸埋めとなつて、番人の老婆及其孫が即死した。龜裂を生じたは、上臺五箇所、臺山六箇所、大鳥三箇所であつた。震後約二十分を経て、本地域の東北隅、字上臺二番地の邊より發火し、一方地域外の千代崎町から火が千代崎川を超えて延焼して來た。其他二方面から火に包圍されて、折柄

の烈風に、電車通の目貫場所が一面の火となつた。土地の有志遠田金子・今井池田等の諸氏は、咄嗟協議して、消防出張所に駆け付け、神崎消防手外二名の應援を請ひ、町の若者數十名を集めて、消防に著手し、千代崎川にホースをつけて、必死の働をした結果、さしもの猛火も次第に勢を殺ぎ、午後七時に漸く鎮火した。焼失面積約一町半四方、戸數百三四十で止まつた。地域内の歿死者七十七名だが、其中の多くは關内關外方面に行つて遭難したものである。土地での死者は約二十名で、其のうち六名は焼死である。死者を多く出した家は、何れも宇上臺で、花商安田幸作方では、主人夫婦及老母の即死によつて、一家全滅。金田カネ方では、主婦及雇人一名の即死によつて、これも一家全滅。運動具商栗本豊次方では、老妻、女及子息が即死した。難波勝太郎(幸)は、妻リツとの間に二人の息子を有ち、兄は二十歳、弟は十八歳位、兄弟とも日々山下町なる南京街の建具屋に勤めて、一家の暮しを立てゝゐた。震災當日勤め先の家が倒潰したので、兄弟は死んでしまつた。父親の勝太郎は、焼跡へ行つて探して見ると、愛兒二人の無残な焼死體があつたので、父親は泣きながら家に歸つて、母親に話してゐる中に、腦貧血で死んでしまつた。斯んな哀話は澤山あつた。

地域の丘陵なる畑や原は、災後恰好の避難場所となつて、市内の罹災民數多入り込ん

だ九月中旬頃には、一日七千餘人に達した。避難民は、薦木片で假小屋を建て、畑の野菜を食つて生活してゐた。丘上の墓地にあつた數多の卒塔婆は、屈強の小屋掛材料として悉く利用されたなど、まるで原始時代に歸つたやうであつた。地域内の有力者は幸に類焼を免かれた者が多かつたので、避難者の救護に何異となく盡瘁した。大鳥小学校は少し破れたばかりだつたので、避難所として、一箇月の間三百餘名を收容した。大鳥の牧畜業後藤氏は、乳牛十八頭の乳汁を當初より悉く避難民に配給して、乳兒や病者を救つた。上臺の米穀商池田氏は、藏米百五十俵を殘らず提供して、配給の來る迄の支へをつけた。臺山の農家金子林藏氏といふ退役水兵は、上臺火災の際、挺身出動して、黒煙の中を潜り廻り、男一人、女五人を救助し、中村町へも出動して、女四人を瀕死から救ひ出した。尙土地の混亂を取鎮めんとて、二日午後八時、單身小湊よりボートを操つて、暗夜の海中に漕ぎ出すこと二時間餘、危険を冒して沖合を警戒中の逐驅艦五十鈴に辿り著いて、根岸本牧方面の混亂状態を具さに物語つて、警備方を懇請し、其の夜自ら二箇小隊の水先案内となつて、其の上陸を完うせしめた。夜半に近い十一時前後、此の一隊が嗽吠の音勇ましく、此方面に行進した時には、沿道盛んに歡聲湧いて、人の心を強からしめた。其の後一隊は、妙香寺山外一箇所に分かれて駐屯し、警備に努めた。本地域の復

歸状態としては、十四年十二月末の調べで、戸數七百三十三、人口二千九百を算した。外人相手の營業は殆んど悉く復舊しない。

本牧町の東北部を成せる字箕輪箕輪下天徳寺宮原十二天原の六字の中、箕輪下宮原十二天原の大部分は市街地で、稍賑はつてゐるが、其他は概ね丘陵又は草原で、人家は至つて少い。災前の總戸數一千二百餘、其の多くは住宅であるが、電車沿道には商店がある。海濱には別荘料理店等も尠からず、所々に漁家もある。夏季には海水浴場も開かれる。震災の影響は箕輪下十二天宮原及原は概して激甚で、全潰半潰合せて全戸數の約七分通りに上ほつた。此等罹災の主なる建物は、字天徳寺の眞言宗天徳寺、箕輪下の渡邊婦人科醫院、察平神社、字十二天の郷社本牧神社、大蔵宮原の村社吾妻神社、半潰等である。岸崩は字天徳寺地内及十二天の孤丘に生じ、宮原沿海の岸は所々崩壊した。火は箕輪下の電車路を挟んで約五十戸を焼き、北方町字泉に延びて、十六戸を焼いた。其他別に字原と宮原とに延焼し、三百二十一戸を焼失した。此中七十一戸は宮原の罹災で、宮原では青年團が總掛りで漸く消し止めた。箕輪でも別に離れて十二戸を焼いた。本地域全體の死者は地元で二十數名、其多くは宮原及原に於てであるが、此外、他所に出で遭難した者があつた。宮原の齋藤醫院では、院長佐助夫妻看護婦一人壓死し、宮原の

出口アサ方では六名焼死し、何れも一家全滅の悲運を見た。他所からの罹災民は、多い時には數千人に及んだ。殘存家屋に寄寓したものの多く、箕輪下天徳寺等の草原に假屋を構へて、露命を繋いだのも尠からずであつた。私立貿易中學校は小破であつたので、數百人收容されて永らく居た。

本牧町の南部なる字牛込八王子下里矢和田三之谷眞福寺配郷間門二之谷一之谷等の界限は、地域は頗る廣いけれども、概して丘陵や草原である爲、人家は多くない。稍、市街地らしき所は牛込八王子下里矢眞福寺等の大部分、若しくは一部分で、全地域約一千三百戸の大半は、右五字にあるのである。震災の影響は、市街地稍激しく、中でも字矢牛込八王子では、家屋は七八分通り倒壊した。此等罹災建物の主なるものは、字牛込の眞言宗多聞院同宗千藏寺、字和田の本牧小學校基督教會堂、字下里なる不動堂、字間門の眞言宗東福院、破損等、字三之谷なる紳商原氏の三溪園は、格別の被害もなかつた。字二之谷なる遊樂園は、丘上に鐵製の飛行塔を新設し、九月中旬から開園される筈であつたが、諸設備或は破壊してしまつた。字八王子海岸の某外人住宅は、海拔十丈の高所より顛落した。字矢では三十五戸、池田では十一戸焼失した。死者は字牛込に三十八人、字八王子に九人、以上は地元及他町に出でての計數で、尙字矢眞福寺の地元で二十一人、其他

諸字を合し、地元のみでは十四人を算する。

一五〇

三 根 岸 町

根岸町の中堀割川の東の字上馬場下坂下及川の西なる字廣地分田の六字は、東北西の三面に丘陵を負ひ、南の一方が開けて、川沿ひの低地には住宅商店等がある。字廣地の大部分は、横濱刑務所が占めてゐる。震災前の戸數一千二百、其の約四分が全潰半潰した。字坂下及馬場の一部が、合せて六十餘戸焼失した。倒潰の主なる建物としては、字馬場の成和石鹼工場、三井製材工場、字上の眞言宗寶積寺潰半、字坂下の眞言宗海照寺潰半、字廣地なる横濱刑務所建物の大部分を倒潰の上焼失を擧げる。天神橋根岸橋坂下橋もさしたる異状はなかつた。死者は刑務所の分を除き、地元では十數人であつたが、關内關外方面での勤め先きで遭難したのが、數十名に上ばる見込である。

(イ) 根岸町の内麥田外四區域

市の西南方根岸町の一部である柏葉麥田鷲山立野及竹之丸を一劃としてこゝに記する。

此の區劃は丘陵地溪谷地が交錯してゐる。溪谷地は俗に鐵砲場と呼ばれて、人家多く、丘陵地には林の間に邸宅が所々にある。東の方は櫻道下の隧道口から車道に通じてゐる。五區合して震災前戸數二千二百廿四、人口約一萬を有し、住民は通勤者が多い。丘陵地の所々に外人館のある外特に大建物としてはない。大震災來するや、溪谷地の人家即ち全區劃の約七分は倒潰し、丘陵地の人家は小學校を始め概ね半潰した。柏葉の市營住宅百一戸も全潰半潰し、十一名壓死した。全地域の歿死者約百名、其の中には關内關外方面に出勤中、遭難した者が相當に多かつた。震災後間もなく、千代崎町の某蕎麥屋、他二箇所より發火し、南風に煽られて、本地域の麥田に延焼し、電車路に沿うて、北側約百五十戸、二百八十世帯を焼き拂ひ、隧道口で漸く終熄した。類焼した津之國屋材木店では、最近三萬圓の木材を買入れてあつたので、火が澤山の材につくや、猛烈な勢ひで燃え上り、辛くも火を免かれてゐた電車線路の南方へも、今にも延焼せんとしたので、土地の青年團は直に出動して、溝水を堰き止めて水を溜め、極力消防に努めたので、火災から免かれることが出來た。住民は今日でも尙之を感謝してゐる。火災に遭つた人々は、先を争ふて背後の妙香寺山及山手公園に避難し、他は概ね其區々々の丘地に入つて窮乏と不安との中に、數日間を過ごした。其後は主として山下橋方面及小湊方面か

ら輸送された配給品に有付き、漸く飢渴を免かるゝを得た。爾來、丘陵地一帯は恰好の避難場所となり、假小屋が到る所に建てられて、富めるも貧しきも一様に、慘めな生活を續けてゐた。流言蜚語も相當盛に喧傳せられ、爲めに此地域で犠牲となつたものが兩三名あつた。災後一年には八分通り復舊した。

(ロ) 根岸町の中、競馬場の北部一帯

根岸町の中、字相澤西竹之丸、江吾田、猿田、大芝等、競馬場の北部及其傍近なる山元町を一括して記述する。此の界限は丘陵地の所々に溪谷地を交へ、多くの字に分かれてゐるが、其の中で市街地は山元町である。人家の稍、多きは前記の五字で、全戸數千八百五十の大部分は此五字及山元町に包有されてゐる。山元町は商家は少しばかりで、其他は住宅である。中には細民窟もある。震災は概ね輕微で、地域總て、全潰六十餘戸、半潰乃至大破は稍、多かつた。全潰の主なる建物は、字大芝の日蓮宗大圓寺、字猿田の日蓮宗圓大院、曹洞宗西有寺等で、字江吾田の江吾田小學校、西竹之丸の幼稚園は大破した。根岸競馬場は本邦では最も古く、有名な競馬場である。同所では事務所と觀覽場が半潰した。相澤の共同墓地の墓石も、約三分通り破壊した。發火は山元町で三箇所、猿田

で一箇所あつたが、何れも消し止めて大事に至らなかつた。死者は地元では九名に止まつたが、他所に出でての遭難者及行衛不明者は、百八十五名もあつた。他所よりの遭難者は、多い時には約十萬を數へ、競馬場内は好い避難場所となつた。其他所在に急造バラックを立て、露命を繋いでゐたものが無數にあつた。災後、他町より移り來る者が澤山あつた。一年半後には戸數約二千に達した。

(ハ) 根岸町の南部一帯

根岸町の南部の一帯の丘陵地及其崖下の海岸の平坦地を一括して記述する。地域の中丘陵地は、人家至つて稀で、全地域約八百戸の内約七百戸は、海岸の平坦地なる字西芝生、芝生瀧ノ下加層の四字に含まれてゐるのである。地盤の關係であらう、丘陵地は同様、平坦地も震災の被害はほんの僅かで、全潰家は約一分通り、半潰は二分通り位に止まつた。全潰の主なる建物は、字瀧ノ上の名所に數へられる白瀧不動堂、字西芝生の池端メリヤス工場等である。根岸小學校は所々破壊した位のものである。瀧ノ上及芝生に崖崩れを生じ、芝生では一戸埋没された。加層上の外人住宅二戸焼失したけれども、周圍が空地であるので、延焼はしなかつた。死者は西芝生及芝生に於て數人を

出したゞけである。他町に出でゝの遭難者は、全地域に三十餘人あつた。他町より遭難者の集り来たことは云までもないことである。

第四節 中 村 町

中村町は市の南部を占めてゐる廣い丘陵地と、中村川に沿ふた平坦地と、堀割川を挟む平坦地との三地域である。丘陵地は概して人が少ないが、根岸本牧方面の丘陵地に較べれば多い。川沿ひの地域は平坦で、人家が稠密してゐる。家屋の倒潰稍多く、殊に北崖下の低地一帯は焼失して、被害を蒙つたけれども、高臺一帯は宇谿及平樂を除くの外概して輕微で、火災も伴はなかつた。

(イ) 中 村 町 西 部

本地域の中、中村橋の西の宇池ノ下、東の宇西は市街地であるが、概ね住宅地で、宇道場には廣大なる縣揮發物貯藏庫及縣衛生試驗場がある。總戸數千六百餘。震災起るや、宇池ノ下は、水田を埋立てた所なので、家屋約四分通り倒潰半潰し、相當の被害を見たが、其他の地域は地盤固く、被害は輕微であつた。宇西ノ谷の河岸通幅約三間、長さ二十間

ほど三尺餘も陥落し、宇池ノ下の池ノ下橋の袂は陥没し、同橋から日枝橋に至る河岸通は、道路の半が、岸と共に河中に墜落した。宇西の久良岐橋の袂も陥没し、其の附近の河岸通も河中に崩落した。道路に異狀のなかつたのは、中村橋以南の河岸通のみで、中村橋が無事であつたことは、避難者にとつて大助かりであつた。宇西及彌八ヶ谷に於ては、高さ約二十間の大崖崩れ二箇所あつた。邊りの山道は永久に交通杜絶となつた。倒潰建物の重なるものは、宇西ノ谷なる眞言宗弘誓院、亞鉛鍍金會社、三筋石鹼會社、宇山田の中華病院等である。火は宇西八百七十番地及八百五十四番地の邊より發火し、南東に向つて延焼した。南に向つた火の手は、青年團員其他必死の努力に依つて辛くも消し止めたが、東に廻つた火の手は遂に宇道場なる縣揮發物貯藏庫の大建物に燃え移り、當地域のみにて四百五十戸を焼失した。揮發物貯藏庫の燃え盛る光景は、凄絶を極めた。無數の油槽は大音響と共に爆發し、火になつた揮發油は、中村川に流れたので、川中は一面火となり、橋を焼き、舟を焼き、殊に對岸第三南吉田小學校々庭の集團避難民を焦死せしめた。火は容易に消えず、一週間の間燃えつゞけてゐた。宇彌八ヶ谷の崖下にあつたセールフレーザ會社及横濱亞鉛鍍金會社の兩社より發火し、兩社は全焼し、て、約三町を隔てた丘上の民家二戸に飛火して、納屋數棟を焼いた。宇池ノ下なるイサ

ゴ豆製造工場からも發火したが、附近住民の努力によつて、消し止めた。地内歿死者の数は十名に満たなかつたけれども、勤め先きの他町に於て死したと想はれるものが數十名ある。地元及他町より字池ノ下界限に避難したものが、一時三萬餘人の多きに達した。本地域には材木商が多くあつたので、材木を提供して貰ひ、それに鍍金會社貯藏の亜鉛板も残つてゐたので、これを利用して假小屋を作つた。一時隙間ないほどに此等の假小屋で埋められた。字道場の揮發物貯藏庫の燒跡には、關西諸府縣聯合寄贈のバラック數十棟の建設されたので、罹災民の幾千世帯が、永らく此處に居住して、バラック村を形成し、集會所浴場賣店等種々の共同施設も出來て、誰云ふとなく關西村と稱せらるゝに至つた。

(口) 中村町東部

中村町の中で東部にある字東中居八幡中村山谷を概括して、中村町東部といふ。本地域は人家のない字山谷を除く外、丘腹の斜面地や、丘下の低地は、中村川に臨んでゐる。戸數約三千七百戸、住民の多くは労働者、職工等で、安宿が軒を並べてゐる。震災の影響としては、丘陵の斜面地とて、地盤は比較的固く、隨つて家屋の倒潰少なく、約三分通りに

過ぎなかつた。倒潰家屋の主なるは、字東なる眞言宗玉泉寺のみで、時宗遊行寺は少し破壊したばかりであつた。字八幡なる八幡神社も小破程度であつたが、字八幡には崖崩れを生じ、崖下の淺村製麻工場全部、秋葉眞田工場及櫻井眞田工場の各一部を埋没して、各、數人の生理めを出した。字東にも崖崩があつて、崖下の木賃宿外二戸を埋没し、是亦數人を生理めとなした。火は地内數箇所より發火し、一面字道場の揮發貯藏庫よりも延燒して來て、一面の火となつたが、それまでには多少餘裕もあつたので、人々は三吉橋、東橋及車橋を渡つて、丘上に遁れた。斯くて本地域では約三千七百戸の中、約三千三百戸燒失し、字八幡の一部及其他に於て約四百戸だけ類焼を免かれた。類焼の重なるものは、縣衛生試驗場、玉泉寺、八幡神社等である。死者は地元では約四十人であるが、他町へ出稼ぎに出でたまふ、遭難した者が多數あつた。一年有半後の戸數は三千三十九戸となつた。

(ハ) 山手中村町

中村町の中で丘陵部の大部分を占めてゐる地域で、東方は地藏坂を以て山手町と境してゐる。地域は鷲打越、平樂、唐澤、中丸などの字に分かれ、災前の戸數千四百六十二を

算し、此中に外人の居宅も多少ある。震災の影響は丘陵地のこととして、家屋の倒潰は多くはなかつたが、宇谿即ち地藏坂の附近では、地元の火及崖下の石川方面からの火を受けて、約百六十戸を焼き、宇平樂でも發火して、約八十戸を焼いた。焼失した主なる建物は、地藏坂の眞言宗蓮光寺、平樂の平樂小學校である。宇谿には崖崩れを生じて、崖下の石川町は、之が爲めに尠からざる損害を被つた。死者は地元で約二十人、其の中にも宇谿なる寫眞業出島某方では、主人夫婦及小供四人壓死し、老母一人だけ生残つたといふ慘事を見た。勤め人多き土地として、勤め先きでの遭難は多大に上ぼる見込である。

第五節 石川町 石川仲町

石川町並に石川仲町は、山手町及山手中村町の北にある。崖下にある街が石川仲町で、之と相並んだ川沿ひの街が石川町で、兩町とも東は一丁目より、西は七丁目に亘り、何れも人家櫛比して、石川町には商店多く、石川仲町には通勤者及労働者の住宅多く、災前の戸数は併せて一千九百七十三で、其七分は石川仲町に屬する。本地域の震災は、單に震災だけでは大慘害を受けなかつたが、次いで起つた火災で、關内や埋地同様、全地域悉く焼失したのみならず、地勢上避難するのが頗る困難であつた爲め、慘死を遂げたものが頗る多かつた。激震の起るや、地内建物の約二分通りは全潰し、約六七分は半潰であつた。石川仲町一丁目乃至五丁目の斷崖は、到る所崩壊し、三丁目の崩壊は、其長さ七十間に及び、崖下の民家約二十餘戸其の下敷となり、生きながら葬られた者が十八名もあつた。突如の凶變に人々何れも驚愕してゐた時、石川仲町一丁目三十五番地、同二丁目四十三番地、同五丁目百五番地、同三丁目五十三番地、これ等の場所より、何分間の間を置いて發火したのである。尙同町七丁目は、其後中村町方面の火を受けた。強風に煽られて、火勢は一層加はり、午後三時頃には、地内一面火の海となつた。南は斷崖絶壁で通ることは出來ず、坂路を辿つて山手に逃がれても、山手は既に火となつてゐた。北は中村川で、對岸は一面の火の海になつてゐる。西の中村町も、東の元町も同様で、何處も此處も火の巷ばかりで、遁路は全く塞がれて了つた。しかし燃え盛るまでには、多少餘裕もあつたので、此の間、見極めをつけた人達や、機敏な人達は、逸早く家族をつれて、大丸、谷地藏坂、牛坂、猿坂、遊行坂等を辿つて、中村町の丘地や、根岸方面に遁げ延びた。併し家財を運び出さうとしたり、或は家人を救ひ出ださうとして、遁げ後れた人々は、襲ひ來つた猛火の爲めに、全く遁路を失つてしまつたが、血氣のある者は、黒煙中を走つて、血路を開いて遁げあふせた者もあつた。煙に捲かれてそのまゝ焼死した者は、澤山あつた。船

が頗る多かつた。激震の起るや、地内建物の約二分通りは全潰し、約六七分は半潰であつた。石川仲町一丁目乃至五丁目の斷崖は、到る所崩壊し、三丁目の崩壊は、其長さ七十間に及び、崖下の民家約二十餘戸其の下敷となり、生きながら葬られた者が十八名もあつた。突如の凶變に人々何れも驚愕してゐた時、石川仲町一丁目三十五番地、同二丁目四十三番地、同五丁目百五番地、同三丁目五十三番地、これ等の場所より、何分間の間を置いて發火したのである。尙同町七丁目は、其後中村町方面の火を受けた。強風に煽られて、火勢は一層加はり、午後三時頃には、地内一面火の海となつた。南は斷崖絶壁で通ることは出來ず、坂路を辿つて山手に逃がれても、山手は既に火となつてゐた。北は中村川で、對岸は一面の火の海になつてゐる。西の中村町も、東の元町も同様で、何處も此處も火の巷ばかりで、遁路は全く塞がれて了つた。しかし燃え盛るまでには、多少餘裕もあつたので、此の間、見極めをつけた人達や、機敏な人達は、逸早く家族をつれて、大丸、谷地藏坂、牛坂、猿坂、遊行坂等を辿つて、中村町の丘地や、根岸方面に遁げ延びた。併し家財を運び出さうとしたり、或は家人を救ひ出ださうとして、遁げ後れた人々は、襲ひ來つた猛火の爲めに、全く遁路を失つてしまつたが、血氣のある者は、黒煙中を走つて、血路を開いて遁げあふせた者もあつた。煙に捲かれてそのまゝ焼死した者は、澤山あつた。船

に乗つて堀割川を下つた者もあつたが、川の兩岸も猛火に包まれてゐたので、途中で船諸共焦死したものもあつた。崩壊した崖地を攀ぢ上らうとして、土塊諸共火中に轉げ落ちたものもあつた。殊に石川仲町一丁目と二丁目との間の宇大丸谷には、少許の空地があつたので、遁げられた數百人はそれへ雪崩れ込んだが、猛火忽ち襲ふて來た。崖を上らんとしても折悪しく其處には、倒れた高塀が道を塞いでゐた。一同は死を覺悟するより外に道はなかつたが、突然群集の中から、石川町の市野佐吉と、翁町の大里正雄といふ二人の若者が躍り出して、必死の力を揮つて塀の二箇所を打壞はし始めた。數人のももの力を合せて打ち壞したので、漸く血路は開かれ、絶望した數百名の者は辛ふじて這ひ上がり、尙苦心をつゞけて、やつとのことで、安全地帯に遁げ延びた。併し後れて來た者や、荷物を惜んでゐた者、凡そ五十人は、遂に其場で敢なき最期を遂げた。以上は主として兩町一丁目乃至四丁目の狀況である。六・七丁目でも、川筋で避難するのは好いと思つて、多くの人々は互に引連れて、一旦船に乗つたのであつたが、青年團員等は之を無謀なことだとし、呼び還して悉く上陸させ、丘地方面に導き避難せしめたので、焼死や溺死する者は少なくなつた。尙同團員達が倒潰を免かれた石川小學校を焼くまいと、一同死力を出して附近の火を消し止めた。斯くて兩町は七丁目に僅か十數戸を殘

しただけで、午後六時頃には全く焼きつくされた。焼失したる主なる建物は、鶴屋呉服店、諏訪神社、妙法堂等で、歿死者も少くなかつた。石川町石川仲町各一丁目併せて百三十五人、同二丁目で五十四人、同三丁目で百二十八人、同四丁目で七十五人、同五・六・七丁目で五十八人、合計四百五十人を算する。五・六・七丁目の多くは壓死者であるが、同一丁目乃至四丁目では、焼死溺死が多いやうに思はれる。一家全滅若くは全滅に近き家を擧げると、石川町一丁目では、勤め人金箱某方で子女三人、鋸目立職加茂下瀧次郎方で夫婦及子息と孫の二人、天ぶら屋山田フミ方で主婦及女子二人、全無職河合某方で女子三人、家具職堀内幸助方で夫婦及子女三人、雇人二人、藥種商内田阿曾次郎方で夫婦及女子四人、全石川仲町一丁目では、日傭職中西某方で主人及子息二人、骨董商杉山修平方で夫婦及女子二人、全醫師飯田實方で夫婦及女子一人、看護婦下婢各一人、俵夫永島某方で家族三人、無職山口某方では、老母及女子二人、疊職簗島某方で子供三人、石川仲町二丁目では、洗濯業島根平次方で夫婦及女子一人、全荒物商飯塚某方で妻及子孫三人、石川町二丁目では、足袋職湯川某方で妻及子女五人、鹽商武藤政吉方で夫婦、母弟二人、女子一人、船具商長田秀作方で夫婦及子女五人、全石川仲町三丁目では、建具職稻田大五郎方で夫婦及女子一人、全日傭業鈴木某方で妻及子女五人、家作主前田重方で主人、母、女子一人、日傭業富

櫻仙次郎方で夫婦及女子二人^減、下宿業長尾カヨ方で主婦及姉女子各一人^減、酒商鈴木宗八方で夫婦及孫女一人、無職小池權四郎方で主人及女子四人^減、洗濯業北澤某方で老母及子女二人、丹野清太郎方で夫婦及女子一人、鍛冶職吉澤某方で妻及子女三人、漬物商月村某方で母及女子二人、ボール箱職須藤某方で子女三人、船夫近藤誠次郎方で夫婦及女子三人、洋食店相澤省次郎方で夫婦及男子二人、下婢一人、同四丁目靴職中村貞次郎方で夫婦及男子一人^減、日備業鈴木庄次郎方で夫婦及女子一人、石川町四丁目では、日備業橋本佐七方で父妻及女子二人等である。大體に於て、兩町とも、一丁目乃至三丁目に於て恸うした不幸な家が多かつた。石川仲町には、堀井戸が多少あつたので、焼跡にバラックを建てるものが相踵ぎ、四丁目には既に十數戸建てられ、鋭意復興に勵んで、一年有半後には戸數が災前の七分通りを算するに至つた。

第六節 元町

元町一丁目より五丁目は、山手町北崖の下に在る長い街である。町の北なる堀川を渡れば山下町で、前後に外人街を控えた關係上、外人をお客とする日需品の商店が軒を並べて、震災前は戸數一千二百十八、人口約六千を有してゐた。大震の起るや、街の背後

なる一帯の斷崖は、到る所崩壊して、崖下に在る數多の家屋を埋めた。又川沿ひの道路には、所々大龜裂を生じ、川岸は崩落した。崖崩れの著るしき箇所を擧げると、一丁目の増徳院後の高さ三間の石垣は全部崩壊し、淺間坂の所謂百一段は、坂上の雨森家と共に有名なものであつたが、地所約三十坪諸共顛落して、其真下の二丁目百九十七番地より三丁目百三十二番地までの數十軒の家屋が埋没され、全滅に近き程度の死者を出した。四丁目の丘腹に在つた太神宮も、崖崩れの爲めに社殿は破壊し、十餘間も押飛ばされた。橋梁は最下流にある山下橋を除くの外、谷戸橋、前田橋、西ノ橋等悉く大破に及び、就中谷戸橋は橋臺諸共河中に墜落し、避難船が之に衝突して、破壊したのもあつた。火は各所に發した。折柄強風に煽られて、忽ちの間に四邊は火となり、一棟も残さず焼失した。逃げるに早かつた者は、横濱公園に入つた者もあるが、多くは間近なる新山下町埋立地に入り、又中には坂を上ぼつて山手公園や、外人墓地等に遁げ込んだ。山下橋が僅な損傷で濟んだし、火も免れたので、避難者にとつて大助かりであつた。遅れた者は、遁ぐるに途なく、已むなく河中に飛び込んで死んだ者もあり、三丁目の崖上なる山手町五十三番の庭内に遁げ込んだ二百數十名は、上下より煽り付けた熱氣の爲めに苦惱一方ならず、焦死者も多數出した。全部で壓死者と溺死者とを四百數十名出した。一家

全滅に近い家は、二丁目古根村新太郎夫婦及子女二人、五丁目石井文吉夫婦及子一人、二丁目石川重三夫婦及子息の妻、子一人、三丁目柳井宇三郎夫婦及子女二人、四丁目中山兼次郎夫婦及子女三人等である。焼失した主なる建物は、横濱高等女學校、太神宮増徳院等である。増徳院は古く大同年間の創立に係る眞言宗の名刹で、洋館ばかり立つてゐる間に聳立してゐたので、外人からも珍らしがられてゐた。當時此の焼野原に踏止まつた町の有志は、元町再興會を増徳院跡に設けて、町民を集め、物質配給の事、バラック建設の事、相互扶助の事、進んでは町の復興の事など、何異となく協議を遂げ、爾來一同銳意以て之が遂行に努めた結果、一年有半後には六百十五戸の復興を見、町並みも稍、整ひ、商況も漸次に復活した。

第五章 本市第五方面

青木町―神奈川町―高島町九・十丁目―表高島町―林町―山内町―新浦島町―千若町―橋本町―子安町

第一節 一般 狀況

青木町・神奈川町・子安町は、本市の第五方面で、市の東北部の廣い地域を占め、東は港内に面し、西と東北は丘陵を負うて、橋樹郡の諸村に隣接してゐる。地震は市内の中心地と較べれば激しいといふほどではなく、丘陵地などは極めて輕微であつた。而かし平地は多少倒潰家屋を出し、火災は免れなかつたので、被害は相當にあつた。その焼失戸數は、青木町は約千七百戸、神奈川町は約千四百戸、合計全焼約三千四百戸である。此の外、各地域を通じて、全焼約三千四百戸を算した。又各地域を通じて全潰約一千戸、半潰二千戸で、全潰半潰全焼を合すれば六千戸である。崖地は、神奈川町・神明町七百二十一番地々先の京濱電車の堤が、幅約五間崩壊して、その下の家屋七戸を埋め、數名が壓死した。橋梁は、漣橋・碧海橋・裏海橋・裏高島橋・海運橋、八千代橋等が、破壊し或は焼失墜落した。歿死者の數は、關内關外方面に較ぶれば、少く、約七十八である。當時罹災者は主